

貢生産をこの遺跡で行なったことが知られる。その後長門国から造東大寺司に進納した銅の重量が、熟銅は一枚平均四〇・六斤、未熟銅三五・五斤、生銅一一・五斤であったこと（前出丹裏古文書）と比較される。東大寺大仏铸造関係木簡では、一畝平均三〇斤代となる。

(2)は銅の生産高を材を横に用いて並記したもので、のち上下を割截して物差に再利用したのであろう。全長二七六mm、縦野線が二三mm間隔で一本描かれている（物差はもう一点あり、野線はほぼ三三mm間隔）。銅には上記熟銅以下とは別に「洗収土交銅」「洗銅」（『大日本古文書』五一二五・一八八など）があり、生産過程で銅成分の回収・再生を図った（中井一夫・和田萃「奈良・東大寺大仏殿廻廊西地区」『木簡研究』一二）。(2)の「洗」はこの洗銅にあたるのであろうか。ただしこの場合単位は斗升である。

(2)は用途不明で、習書木簡ともみられるが、そうであれば上端に切り込みがあり、使用済の付札を利用したことになる。「借□」はウジ名か動詞か判読が困難。「借馬」なら野身連とともに、遺存例からもと畿内在住の人物であろうか。天平五年（七三三）山背国愛宕郡某郷計帳に野身連・借馬がみえる（借馬・物部借馬連は讃岐国でも知られる）。

訳説にあたって、奈良国立文化財研究所寺崎保広・森公章両氏および佐藤信氏のご援助・ご助力をえた。

（1～7 池田善文、8 八木 充）



（高松南部）

1	所在地	香川県高松市東山崎町
2	調査期間	一九八九年（平1）一〇月～一九九〇年三月
3	発掘機関	財香川県埋蔵文化財調査センター
4	調査担当者	広瀬常雄・広瀬直樹・牧野啓造・植松邦浩・森下友子・藏本晋司
5	遺跡の種類	集落跡・水田跡
6	遺跡の年代	一四〇～一八世紀
7	遺跡及び木簡出土遺構の概要	

東山崎・水田遺跡は、高松市街地の東方約5km、高松平野の東部に位置している。遺跡の標高は一〇m前後を測る。

本遺跡の調査は国道一号高松東バイパス建設に伴うもので、調査区の南北幅は四〇m、東西の長さは一kmに及ぶ。調査の結果、一四世紀～一五世紀・一六世紀末～一七世紀後半の集落

（森下友子）

跡、一七～一八世紀の水田跡が検出された。C地区では、調査区外へ連続しているため北側は不明であるが、東・南・西側は幅三～四mの溝によって区画され、その中央には数基の掘立柱建物・井戸・土坑によって構成される東西四〇m、南北二三一m以上の屋敷地が検出された。屋敷地の東側を画する溝の東側には用水路と考えられる幅四mの溝が検出されたが、木簡はこの溝より三点出土した。いずれも呪符木簡である。他に土師器・陶磁器（中国産・瀬戸・美濃産）、唐津産、備前産）、木製品（漆椀・下駄・折敷ほか）など整理用コンテナ一〇箱の遺物が出土した。一六世紀末から一七世紀前半のものと考えられる。

8 木簡の釁文・内容

- (1) 「×(梵字) 呕咷唎(符籙) 急々如律令」
- (2) 「×(梵字) 呕咷唎」
〔(96)×42×2 019〕
- (3) ×(符籙) 急々如律令」
〔(120)×(26)×2 081〕

木簡の釁文にあたっては、奈良大学水野正好氏、奈良国立文化財研究所史料調査室の諸氏のご教示を得た。

9 関係文献

〔助〕香川県埋蔵文化財調査センター『財団法人香川県埋蔵文化財調

